

Freude

vol. 1826 2025. 5. 21 wed

5/28(木) 18:30 小田北
 6/4(日) 18:30 車海田 ← フェジ
 6/11(日) 18:30 車海田 ← フェジ
 以上1回ずつ
 車海田にてみられたい! 説明あり!

来年はハイドン「ハルモニー・ミサ」と「もう一曲」はモーツァルト「戴冠式ミサ」

せっかくなんで、モーツァルトのミサのこと(^^♪

モーツァルトは、生涯で 17 曲のミサと、死者のためのミサを 1 曲、作曲しています。

フロイデ演奏歴↓

k.49	ト長調『ミサ・プレヴィス』	(k.49, 47b)	1768 (12歳)	ザルツブルク	
k.65	二短調『ミサ・プレヴィス』		1769	司教は、	
k.66	ハ長調『ドミニクス・ミサ』		1769	シュラッテン	
k.139	ハ短調『孤児院ミサ』		1768	バッハ	
k.140	ト長調『パストラル・ミサ』		1773?		2025
k.167	ハ長調『三位一体の祝日のためのミサ』		1773	ザルツブルク	2020
k.192	ヘ長調『ミサ・プレヴィス』		1774	司教は、	
k.194	二長調『ミサ・プレヴィス』		1774	コロレド。	
k.220	ハ長調『雀のミサ』		1775	窮屈のあまり	2022
k.257	ハ長調『クレド・ミサ』		1776	1777 年	2018
k.258	ハ長調『シュパウル・ミサ』		1775	(21 歳) で	
k.259	ハ長調『オルガン・ソロ・ミサ』		1775-76	辞職! ただ	
k.262	ハ長調『ミサ・ロンガ』		1775	諸般の事情	2022
k.275	変ロ長調	(サン・マリア マテウス)	1777	でまた戻り、	
k.317	ハ長調『戴冠式ミサ』		1779	再度コロレド	2016
k.337	ミサ・ソレムニス ハ長調		1780	に仕えたが	1988
k.427	ハ短調『大ミサ曲』		1782-83	1781 年	2006
k.626	レクイエム 二短調	(アヴェ・マリア 21702)	1791 (35歳)	遂に脱出!	2015
				ウィーン拠点	2018
					※

※レクイエムは、1986、1990、1996、2004、2016、2024 に演奏し、次は 2027 年予定です。

「戴冠式ミサ」は、コロレドの締め付けに耐えきれなくなっている頃、さまざまな制限を逆手に取って、モーツァルトが自身のいろんな魅力をギリギリいっぱい全部詰め込んだ宝石箱♪ 明るく快活でモーツァルト・ミサの中でも一番人気! 今回、ハイドン「ハルモニー・ミサ」の楽器編成に近い作品 & 歌いごたえ、聴きごたえなどいっぱい検討して、亀井先生が選んでくださいました。団員のみなさんの中にも一度は歌ったことある、という方も多いのでは? また、初めての方も「た～のし～」と思ってもらえそうですよ(^^♪ お楽しみにね!

今回の「パストラル・ミサ K140」(1773 年・17 歳)にまつわるお話

この曲は、最初、偽作とも言われたりして紆余曲折の扱いでしたが、今では、モーツァルト 1773 年ごろザルツブルクでの作曲作品として「ホンモノ！」となりました。

自筆譜が散失し、モーツァルトのミサ曲としては他に例を見ない「パストラル風」な性格のために、従来偽作とみなされていました。モーツァルトの研究家では、ヤーンが様式的観点から真作と主張、ケツヘルは K140 の番号を与えつつも疑念を表明。その後アインシュタインが偽作を断定、しかし、ワルター・ゼーンは、モーツァルトの遺品の中にモーツァルト自身がページ数を打った筆写譜の存在が確かめられたこと、アウグスブルク聖十字架修道院にモーツァルトが細やかな修正や書き込みを施した筆写譜が伝えられていること等を理由に、これを真作と判じ、新全集に収録しました。1773 年という作曲時期は、このミサ曲がそこから多くを借用していると思われるバリエ曲の成立時期から割り出されたものです。

ワルター・ゼーンは、この曲がザルツブルクの司教座聖堂用に、しかもパストラル（キリストの聖誕のときの羊飼いにちなんで、クリスマスに演奏される 8 分の 6 拍子や 8 分の 12 拍子の子守歌風の曲）のミサ曲であることから、1773 年の聖誕祭のために作曲されたと考えらるべき信頼できる論拠を示しています。タイトルの「パストラル」は「キリスト生誕に関連する 3 拍子系の田園的な雰囲気」をこの曲が持っていることに由来しています。もちろん、あとから命名されたもの。

ちなみに、このころモーツァルトにとって大きな事件がありました。実はその前々年 1771 年 12 月、モーツァルト父子の最大の理解者だったシュラッテンバッハ大司教が亡くなったのです。父子の落胆は大きかった。そして 1772 年 3 月悪名高きコロレド大司教（音楽に無理解。でも司教としては偉かった？知らんけど）が就任しました。モーツァルト父子はこの段階では予定されていた演奏旅行を許され、各地を回っています。1773 年のザルツブルク滞在は、イタリアから戻った 3 月から 7 月にウィーンに旅立つまでの 4 ヶ月間でした。ザルツブルクでは、コロレドの就任儀式関連の作曲を精力的に行ったようです。

なにしろ、具体的な記録や資料が残っていないので想像するしかないのですが、モーツァルトは、これ以降、コロレドの締め付けのなかで、窮屈な作曲を強いられることになりますが、この K.140 はギリギリ「コロレドに締め付けられる前の自由な音楽活動」での音楽、と言えるかも。

ザルツブルク時代の他のミサにはない、オシャレな感じ、そういうところから来てるかもしれないですね！

※文中のヤーン、ケツヘル、アインシュタイン、ワルター・ゼーン、はいずれもモーツァルトの研究家・音楽史家。

物理学者ではありません^^;

ソリスト変更のお知らせ ・ テノールのソリストを石川太一先生にお願いすることになりました。

石川 太一（テノール）

京都市出身。相愛大学音楽学部器楽学科卒業。奈良教育大学大学院修了。

クラリネットを鈴木豊人氏に師事、K.ライスター氏の指導を受ける。大学卒業後クラリネット奏者として演奏活動をするが、奈良教育大学大学院音楽教育専修にて声楽を学び、その後本格的に声楽に転向する。

「第 52 回なにわ芸術祭新人奨励賞」受賞。「逸翁美術館マグノリアサイタル」、「泉の森フレッシュガラコンサート」他多数の演奏会に出演。ベートーヴェン《第九》、ヘンデル《メサイア》他宗教曲でのテノールソリスト、オペラやディナーショーなど幅広い演奏活動を展開している。

この度 6 月 29 日、EXPO2025 バチカンナショナルデーにおいて、モーツァルト《戴冠式ミサ》にてテノールソリストとして出演予定。

これまでに声楽を福田清美、林誠各氏に師事。